

地道に誠実な仕事を続けて70周年 地域密着で誠実なサービスを提供

不動産事業とタクシー事業を軸に、多角化を進め着実に歩み続ける宝グループ。今年70周年を迎え、六月には「創業70周年記念 感謝の集い」が行われた。ここでは長崎守利代表取締役会長に話を聞いた。

——70周年を迎えてのご感想はいかがですか。

長崎 一般的に、企業の寿命は三〇年とも言われますが、七〇年と言えば自分の年齢（六十五歳）より長いことを考えますと、企業に対するニーズが変化し厳しい時代をくぐりぬけてきた年月は、改めて長く重いものだと感じています。

——その間の歴史、多角化の歩みについてお聞かせください。

長崎 宝グループは業種として

は一業種だけではありません。多角化は昭和二十年代から始まっています。

終戦直後、焼け野原になった名古屋の地に立った創業者が技術者たちを集めて自動車製造にとりかかりました。「宝ビック」と命名した車一〇台で二十六年にタクシー事業をスタートさせたのが始まりです。

事業の拡大とともに従業員の住宅の確保が必要になります。三十年〜四十年は住宅困窮時代で、自

社で社宅や寮を整備していきました。それが現在、グループの中核事業となった不動産事業につながりました。その後も時代の変化に対応しながら、様々な事業に取り組んできました。

五十五年にオープンした金山ワシントンホテルプラザ（現…名古屋金山ホテル）を皮切りに、レジャー事業にも進出しました。六十一年に、健康ランドの先駆けとなった『湯くとびあ宝』（南区笠寺）、平成六年に笠寺ワシントンホテルプラザ、十一年には京ヶ野ゴルフ倶楽部（三重県）をオープンさせて今に至ります。

——この中でも不動産事業はバブル崩壊などあり特に大変だった

のでは。

長崎 弊社のマンション事業が好調になったのは実はバブル崩壊以降でした。バブル期に庶民に手が届かなかったマンションが、地



六月に行われた「創業七〇周年記念 感謝の集い」